

2018. 2. 24

## 「本書」に出会えた幸運に感謝！

rakuzann

最近の世相がとみにポピュリズムに流れすぎていることに対し、評者はなんとも苦々しい思いをしていたが、そんな折に本書を一読して実に“安堵感”（救いーといい替えてもいい）を覚えた。

あの悲惨極まりない福島原発事故が発生してからまもなく丸8年を迎えんとしている。しかし、あいかわらず「情報」は氾濫しているものの、いったいどこに問題があったのか、責任の主体がどうなったかなど、門外漢の評者にはサッパリ分からない。依然曖昧のままに、またも風化されんとするのか、と思うのは評者だけだろうか。

世に原発に関する書物は、肯定論、否定論を含め、実に多く存在する。しかし、本書はそれらと類を異にするものだ。これまでに評者は、「原発について賛成か反対かは不毛の次元。科学者としてそういう政治的立場はとるべきでない」とする高名な元原子力物理学者がいたことも、「原発は安全、備えあれば憂い無し」と楽観論を繰り返す経済人・政治家・官僚・ジャーナリスト（含む、芸能人）らがいたことも知っている。

本書は、福島原発の実態を広範な情報・資料と著者自らの克明な現地調査の結果にもとづいて成り立っている。そこには、よくある机上の論は一切無い。記述はどこまでも現場目線に徹し、冷静である。

著者は、長年にわたり石油・化学・製鉄プラントの設計・建設に携わってきたエンジニアである。このことが、他にない本書の優れた特徴をもたらしていると思われる。

それでは、以下に評者なりに、本書の「レジュメ」を纏めてみる。

### 1 「原発プラント」と「産業プラント」の違いを明示ーこれに基づく著者独自の「脱原発論」の展開

先ず最初に本書は、原発プラントと産業プラントの違いを明らかにする。それはリスクの確率論でなく、事故が起きた場合の被害のスケールがケタ違いにちがうこと、即ち原子力プラントの特異な危険性（修復、被害者の救済等）をプラント技術者としての実体験と具体的資料によって明示。

原発の本性は産業機械であること、これを人間が運用するものであることーこの至って単純な事実をわれわれに想起させくれる。その上で著者の脱原発論を展開。

「事故はいずれまた起きると」と著者は断定する。その論拠は、「絶対に失敗しない技術が無い以上、原発は成立しえない。機械には故障や不備。人間には手抜きやミスが付きもの」。

内外を問わず過去の事例を分析し、事故の大半は、すべて初歩的ミスもしくは怠慢によるものであることを指摘。

「機械（人工物）は必ず壊れるもの」「人間は必ず誤りを冒す」。その故にこそその原発否定の論は、今更ながら一つの“真理”と思えるほどの説得力がある。

実に単純にして明快。これは「機械」と「人間」に深い理解があってこそ、言い切れるものでないか。

## 2 事故後の福島を「現場の実態面」から総括—悪環境で働く労働者の厳しい現状も浮き彫りに

次に本書は、事故現場を著者自身が実見、実査し、資料も駆使して実状を詳述。特に以下の諸点を通して、被爆労務のマネジメントが、かのチェルノブイリなどと比較して雲泥の差があることにも、触れる。

- ・事故現場の「後始末」作業の実状— 前例のない難解作業、見通し立たぬ作業計画、対策の不振と無駄
- ・当事者たる電力会社等の人材不足—管理者の知識・経験不足、手違いの連続、責任不在、熟練労働者不足
- ・被災現場の目を覆う労働疎外—作業員の人権軽視、被爆作業契約の不備、パワハラ、モラルハザードの存在
- ・階層的下請け構造— 元請け（大手ゼネコンなど）と下請け（八次まで）、偽装請負・違法派遣の常態化、ピンハネの横行

さらに、本書は、事故現場を取りまく周辺関係地域（自治体）の実状にもスポットを当て、「被爆と引き替えの町づくり」に警鐘を鳴らす。

- ・復興政策イコール相も変わらぬハコモノ行政（ウワベだけ）
- ・事故などなかったかのような「安全神話」復活の兆し

さて、評者は、これら事故後の現状を読んで、“戦慄”（怒り—といい替えてもいい）を覚えた。

なるほど、事故の切っ掛けは自然災害（地震・津波）かもしれないが、現出している諸問題（原発政策、復興政策をも含めて）は、中身が「人災」以外のなにものでもないことが分かったからである。

【註】 「人災」とは人間の怠慢・過失・不注意などが原因となって起こる災害。天災の被害が、防災対策の不備や救援の遅延などで増幅された場合にもいう」（広辞苑）

## 3 結びとして

以上、本書は原発を、その技術的側面、物的側面、人的側面、社会的側面から実に多面的にとらえたものである。

そして、本書全体を通して、北欧やドイツなどはもとより今や中国までもが再生可能エネルギーへカジを切っている時代潮流に反し、電力供給の一手段にすぎない原発に固執する一甚大なリスクがあることを体験したにもかかわらず一ことの愚かさを説いている。

なお、本書の最後に、著者は、原発の利益者としての電力会社の立場と事故の被害を受ける市民（消費者）とは乖離していること。両者の利害を総合的に判断するもの不在—規制委等への幻想、行政府の不作為にも言及しつつ、脱原発先進国ドイツの原発の選択問題を第三者的な機関に付託する方式（「原発倫理委員会」）を紹介している。

さはさりながら、この日本社会で世俗を超越した倫理的主体を組織することができるかどうかにはさすがに口を濁しているように見える。

なるほど、「原発は終わった」というが、本書は何故終わらさねばならないかを著わしたものであり、いかにして終わらせるかを問うたものでない。

評者はかつてある元ドイツ駐在公使が、「ドイツ人は日本人が『ワルイこと、イヤなことを見ようとしな。キレイなこと、美しいモノを見たがる傾向がある』とみている」と言っていたのを思い起こす。

「富士山」を見るのは好きだが「原発被災地」の光景は見たくない。これが多くの日本人の偽わざる心境でないか。

本書は原発問題を解明してくれると同時に、イヤなこと、見たくないことを直視すべきであること。経験や事実に沿って思考、判断することの大切さを教えてくれた。

評者は 著者のこの真摯な労作によって、脱（非）原発は心身ともにエネルギーがいるもので、中途半端に甘えた態度では全うできないものであると理解した。

何とならば、原発問題は日本の社会の生き写し（実像）。脱（非）原発とは「脱（非）原発社会」をつくること。即ち、日本社会をつくりかえることだからである。

著者は 本書が一般常識人との問題認識を共有できる切っ掛けになればと希っているという。その意を大切にしたいものだ。

よく数年にいちど没入してしまう本に出会うことがある聞くが、本書がまさに評者にとってその一冊だ。本書に出会った幸運に感謝したい。

日本の将来を気になる方、考えたい方に、そして原発肯定（賛成）の方にも一読をお勧めする。